

美術館で音楽と朗読

板東 浩

名画ピカソの「ドラ・マールの肖像」

が目の前に。その傍らで、いま私は名曲「展覧会の絵より『プロムナード』」を演奏している。そういうえば、この状況は、この曲が作られたときの状況にぴったりだ。ムソルグスキは、友人の画家ビクトル・ハルトマンの遺作展の絵からインスピレーションを得て、作曲したという。リズムは6拍子と5拍子が合わさった複合なもの。あたかも、絵画の前をゆったりと散歩（promenade, 仏）したり、足を進めたり、止めたりと、不規則なリズムを表しているのかもしれない。

平成二十一年十月、徳島県立近代美術館で、演奏と朗読による新しいコラボレーションの試みを担当させていた。音楽と詩のコンサートへ入

ノフ作曲の「ヴォカリーズ（Vocalize）」。
フランス語の「ヴォカリーズ（Vocaliser）（声にする、声だけで歌う）」の命令形「Vocalise」に由来する。メロディーは波のように揺らぎ、ハーモニーは複雑に推移し彩りが微妙に変化していく。本曲に併せて、竹内氏が作られた命の大切さを訴える詩も披露された。

プログラムには、いろいろな仕掛けを盛り込んだ。従来、私どもがかかわっている音楽療法セッションでは、常に相手の反応を感じながら、いろいろなアドリブを交えていく。同じように、日本のコンサートも観衆参加型とし、日本の名曲である紅葉とふるさとを一緒に歌った。

また、音色によって印象が大きく異なるため、いろいろな工夫を。キーボードには、ピアノやハーブシコード、パイプオルガン、弦楽器、電子音、ヴィブラホン（オルゴールに類似）などの音が備わっている。音色を使い

と風景をめぐる」である。美術館の展示室に静かにたたずんでいるのは、秋の季節にマッチした所蔵作品の数々。その雰囲気にあわせて、詩を朗読したり、音楽を奏でたり、美術と対話したり。穏やかでエレガントな午後ひとときを、お楽しみいただくという斬新な企画なのである。

驚くことに、当日は予想していた数倍の聴衆が集まってくれた。演奏や朗読、解説は、展示室の中で場所を変えて行われる。そのため、八十人以上の方々に対して、プロゴルフのトーナメントで数多のギャラリーが移動する様に、ストーリーに合わせて次の作品へと動いていただいた。

本コンサートで主な出演者は、詩人

分け、ホルンとデュオで対話するとき、バラエティーに富むイメージが伝わるように試みた。

さらに、朗読のBGMには、讃岐で産出されるサヌカイト（石の楽器、磬石）の音色を。すると、ウインドウチャイムのように、天からきらきらした音と言葉が舞い降りてくるかのようだった。

ここで、関連事項として、漢字にかかわるエピソードに若干触れたい。本来、音とは、人間と神との間で意思疎通を行うツールであった。口から出る声を「音」という。音十門＝聞となり、聞とは光も音もない状態である。一方、心で考えることが口から出てくるのが「言」となる。

太古の昔から、人類は音から音楽を、言葉から宗教や医学を生み出してきた。儀式において棒で打つ音がリズムとなり、朗朗と詠う声如歌となった

で児童文学者の竹内紘子、ホルン奏者の錦織悠、ピアノリストで内科医の筆者という3人である。さらに、司会者で朗読も担当する大島あゆみ、音楽構成の吉岡明代、企画の森芳功の各氏も一緒に支えてくださった。

最初に演奏したのが、エルガーの「愛の挨拶（Saluti, amour）」とても明るく、優しい愛に包まれて、心も身体もゆつくりと揺らいでくる。聴衆の反応から、プレリユードとして、やはり最適であっただろう。なお、題名の saluti や salutation は、英語やフランス語、スペイン語で、「挨拶、やあ、健康、乾杯」などの意味を含む共通の単語なのである。

秋という季節にふさわしく、哀愁漂う曲として取り上げたのが、ラフマニという経緯がみられる。

声の旧字体は「聲」であり、紀元前5世紀頃に中国にあった楽器「編磬（へんけい）」に由来する。私が中国に出張した際、目の当たりにした楽器だ。石を薄く加工した石琴をひもでつるして、バチで打ち鳴らす。つまり、ひもで吊るした磬（ケイ、声）を、打つて（爰）、それを耳で聞く（耳）ことが、聲（声）になった。同様に、耳で聴くことは、聴耳十目十心となる。

今回、私たちは貴重な機会を賜った。詩歌、音楽、美術という三位一体の芸術療法で、皆様が心に気持ちよい汗をかき、芸術の秋を堪能してください。また、「言葉はもともと『音』だった」という観点で、ピアノリストで作曲家の谷川賢作氏は、父の俊太郎氏と共に朗読と演奏活動をされておられる。谷川先生のレベルに近づくよう、研鑽（けんざん）していきたいと思う。